či čing onunč i bars yïl altïnč
至 正　第十　虎　年　第六

ai tört yangi γa üč lükčük balïγ
月　四　新(日)ニ　ユチュリュクチュク　城ノ

lïγ χulut men yangi bošγutčï sarïγ tutung
人　クルト　余　新　學ノ人　サリク　都統ガ

asudai oγul ning lingči si üzä bitidim sadu ädgü
アスタイ王子(?)ノ　令旨　ニヨリ　書寫セリ　善哉(Sādhu)善哉

と記されてある。至正の正 chêng が čing で寫されて居ることは、一見異例の如く思はるゝかも知れないが、此等の書物の寫された沙州地方の音には、唐代から既に -êng を -ing で寫した例もあつて、唐代に書かれたと思はるゝ漢蕃對音千字文には、蒸 chêng に對して čing の音を與へて居る。尙南方の廣東音などを參考に資し得るとすれば、今も「正」字はこゝでは -ing を以て終つて居る。寅の年で či čing の音と認め得る年號の十年に相當するものは、此の元の至正 chih chêng 十年以外に求め得られないことは、余輩の此の推定を裏書するものと信ずる。

そて此の如く解釋すると、この數行の奥書は、敦煌のこの洞窟の塗込められたのを宋初時代の事と見る說に對して、一大打擊ともなるものであるが、之についてはペリオ氏やスタイン氏は、此等僅少の書物だけは、光緒二十六年（一九〇〇年）此の洞窟の書の發見された以後に、他の場所から搬入されたものであらうと說明した。スタイン氏の記述によつてその大略を述べると、この窟內に高く積み上げられた文籍の頂上に、大きな布で綾く包んだ二包